

丹後開発農地における茶栽培の技術確立 (農林センター)

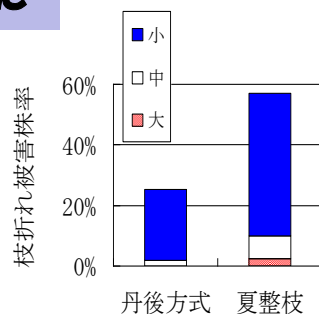
丹後地域で茶の雪害を軽減できる幼木期の整枝体系を確立しました。また、新品種「鳳春（ほうしゅん）」「展茗（てんみょう）」の丹後地域における幼木期の生育を明らかにしました。

1 丹後地域で雪害を軽減する方法が分かりました

定植1年目から秋せん枝を行い、その後定植3年目までのせん枝は春と秋の年2回実施する体系（丹後方式）により、枝条が充実し積雪による枝折れ被害が軽減されます。



定植1年目の秋整枝をしなかった茶園
(枝条が雪で引っ張られて分枝部が裂けやすい)



積雪による枝折れ被害 (2009年)
(定植4年目、やぶきた)

* (小)株当たり1~40%の被害程度、
(中)41~80%、(大)81~100%とする

2 新品種「鳳春」「展茗」の丹後地域での生育

萌芽期				新芽長 (cm/日)		新葉数 (枚/日)		
品種	2009	2010	2011	品種	2010	2011	2010	2011
鳳春	4/12	4/10	4/19	鳳春	0.34	0.24	0.17	0.13
展茗	4/16	4/14	4/22	展茗	0.28	0.15	0.15	0.09
やぶきた	4/14	4/12	4/21	やぶきた	0.41	0.37	0.19	0.13

(参考) 標準的な伸長速度 0.3~0.4cm/日、開葉速度 0.17~0.2枚/日

- ・ 積雪による枝折れを防ぐには、丹後方式整枝が有効
- ・ 新品種の萌芽期は、主力品種の「やぶきた」と比べ、「鳳春」は2日早く「展茗」は2日遅い
- ・ 幼木期の生育は、「やぶきた」と比べ「鳳春」は同程度、「展茗」はやや遅め

- ・ 丹後方式により幼木期茶園の整枝を行うことによって、積雪による被害が軽減でき、農家収益の確保につながります。